HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	開会・挨拶
Author(s)	近藤, 智彦; 蔵田, 伸雄
Description	公開シンポジウム「『LGBT』はどうつながってきたのか？」. 2018年10月8日. 北海道大学文系共同講義棟（軍艦講堂）2階8番教室, 札幌市.
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74606
Type	conference paper
File Information	LGBT2018-3_kaikai.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院文学研究科 応用倫理・応用哲学研究教育センター主催　公開シンポジウム

「LGBT」はどうつながってきたのか?

開会・挨拶

（近藤）　これより、北海道大学大学院文学研究科応用倫理・応用哲学研究教育センター主催の公開シンポジウム「『LGBT』はどうつながってきたのか?」を開催いたします。

私は、本シンポジウムの司会の一人を務めます、応用倫理・応用哲学研究教育センター事務局長の近藤智彦と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

今年は全国的にさまざまな自然災害が発生し、とりわけ北海道では胆振東部地震の残した爪痕がいまだ消えてはおりません。そのような中、昨日の「さっぽろレインボープライド」も台風 25 号にハラハラさせられましたが無事とりおこなわれ、それに続いて本日、どうにか本シンポジウムの開催にこぎ着けられたことを、企画者の一人として何よりありがたく思っております。

まず、主催者を代表いたしまして、北海道大学大学院文学研究科副研究科長の蔵田伸雄より皆様へ開会の挨拶がございます。

（蔵田）　皆様、こんにちは。本日はお忙しい中、また台風襲来も予想された中おいでいただき、まことにありがとうございます。北海道大学大学院文学研究科副研究科長を務めております蔵田と申します。このシンポジウムを主催しております応用倫理・応用哲学研究教育センターのセンター長を昨年度に務めていた関係で、本シンポジウムの開会にあたり、一言ご挨拶をさせていただきます。

本センターはこの春名称を変更いたしましたが、昨年度までは応用倫理研究教育センターという名前でした。本センターは設立されてからこの 10 年余り、応用倫理のさまざまな分野の研究と教育に従事してまいりましたが、その重要なミッションの一つは、ジェンダー・セクシュアリティ関連の研究と教育を行うことでした。これまでに、「ワーク・ライフ・バランス」「老いとテクノロジー」「女性映画」「結婚という制度」「教養とジェンダー」といった問題を扱った、一般公開のシンポジウムやフォーラムを開催してまいりました。また、男装、女装の「異性装」といったトピックも扱ってまいりました。このように男女共同参画のみならず、ジェンダー・セクシュアリティの多様性を考えることを意図した一般フォーラムも開催してきたのです。例えば 2015 年には、今回もご登壇いただいている、本学の元法学研究科教員の鈴木賢先生をお招きして、一般公開フォーラム「同性パートナーシップ制度導入を考える」を開催いたしました。またそれを受ける形で、2016 年には「シティズンシップと市民運動～ LGBT をとりまく日本的事情～」というフォーラムを開催しました。この２回の内容も含めて、本センターでのジェンダー・セクシュアリティ関連のシンポジウムの記録は本センターのホームページで記録集として公開しております。また本年の 6 月には、在日フランス大使館との共催で、日仏討論会「平和とダイバーシティ：大学における LGBTQ の人々の受入れの促進」を開催いたしました。それ以外にも、ゲイであることをオープンにしている卒業生による講演会なども行ってまいりました。

本日のシンポジウムのテーマは「『LGBT』はどうつながってきたのか?」です。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーと呼ばれる人々は、社会における少数者です。ただでさえ少数者であるのに、偏見を恐れて家庭や学校、勤務先でカミングアウトすることすらできずに、自分の性的指向を隠している方も少なくないので、仲間やパートナーを見つけることも困難です。社会の中で孤立し、切り離されて生きざるをえない方も多いでしょう。それは、大学というコミュニティの中でも同様です。そのようなコミュニティや社会の中で、LGBT の人々はどのようにすれば「つながる」ことができるのでしょうか。

最近は性的指向であるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルと、性自認であるトランスジェンダーをまとめ、さらに LGBT 以外の人もとらえることができる言い方として SOGI、sexual orientation and gender identity という言い方をすることもあります。札幌でも同性パートナーシップの制度が始まりましたが、社会もジェンダー・セクシュアリティの多様性を今さらながらようやく認めつつあるように思います。まだまだ先は長いとも思いますが、本日の公開シンポジウムが、性的少数者がより生きやすい、安心して生きられる社会を作ることに少しでもつながっていくことができればと思います。登壇者の皆さんのご議論に期待いたします。

以上をもって、私からの挨拶とさせていただきます。（拍手）

（近藤） 次に私から簡潔に、本日のシンポジウムの趣旨を説明いたします。

私どもの組織の話から始めて恐縮ですが、私どものセンターには「応用倫理・応用哲学」という少し怪しげな分野名がついております。一般に文学部の学問は役に立たないと揶揄されることがありますが、中でも哲学という学問は、特に役に立たないものの筆頭と普通はみなされているかもしれません。哲学が本来目指す対象は ── 冗談ではなく ── 永遠不変の真理ということになりますので、今日、明日のことというよりは、千年先、二千年先、あるいは千年前、二千年前のことを見つめるという傾向があります。しかしこのことは、ともすると現在の課題に対して悠長すぎることを述べることになったり、それだけならまだしも、タイミングを外した血迷いごとを述べることにもつながりかねないという危険を伴います。そうしたことへの反省を踏まえて、現実世界の課題との接点から哲学・倫理学というものを捉え直そうという狙いが、少なくとも私の理解では「応用倫理・応用哲学」という名前には込められています。そうした中でこのセンターでも、今回のシンポジウムとテーマ的に関係する現実の課題への応答への試みとして、2015 年と 2016 年に特に同性パートナーシップ制度を取り上げた一般公開フォーラム、そして今年の 6 月には、大学における LGBTQ の学生・教員の包摂をテーマにした日仏討論会の開催への協力といった活動を進めてまいりました。

本日のシンポジウムは、プライドパレードの翌日に開催するのにふさわしく、「つながり」をテーマといたしました。ただし実を申し上げますと、ただいま挙げたこれまでの当センターの企画に比べると、今回はあえて、今日、明日の問題と言うよりは、少し悠長な、よく言えば ── あるいは悪く言えば ── いわゆる“文学部らしい”テーマを設定したつもりでした。本シンポジウムの全体の趣旨は、お配りしたプログラムにも「ここで言う『つながり』というのは、セクシュアル・マイノリティの権利運動を当然視野に収めながらも、それにとどまらない多様なつながりを含むものとして捉えています」とご説明しましたとおり、表だって議論されることは少ない多様な「つながり」の形に目を向けることを狙ったものです。また、LGBT という言葉に括弧がついていることが気になった方もいらっしゃるかと思いますが、これも、この言葉が生まれる前からの歴史を振り返る、あるいはこの言葉からこぼれ落ちる可能性があるものにも目

を向ける、という意味を込めたつもりです。

とはいえ、すぐに講演の中で触れていただくことになりますし、皆さんもご存じかと思いますので具体的には申し上げませんが、ここ数カ月のLGBTをめぐる政治家の発言に端を発した激しい論争 ―― というよりも騒動 ―― によって、今回のシンポジウムのテーマである「つながり」、そしてその裏にある「分断」をめぐる問題が、図らずも悠長どころか喫緊の課題になってしまったと感じております。この喫緊の課題に対して、今回のシンポジウムは何か分かりやすい一つの答えを与えるものにはならないかもしれません。しかし、困難の中にありながらも多様な仕方で「つながり」を模索してきた歴史を改めて振り返ることこそ、現代の私たちには気づきにくくなっている異なる可能性を指し示してくれたり、未来への希望を与えたりしてくれるのではないかと考えております。

本日の進行予定を確認します。

まず前半では、鈴木賢先生、清水晶子先生、石田仁先生のお三方に、それぞれ30分ほど続けてお話しいただきます。その後、休憩を15分ほど取り、後半は、北海道大学の大学院生および卒業生で、昨日のさっぽろレインボープライドの実行委員も務めた、斉藤巧弥と満島てる子の二人を司会に加えて、討論を進めてまいります。

皆様のお手元に質問用紙があろうかと思いますが、お三方のお話を聞いてご質問のある方は、この質問用紙にご記入ください。質問用紙は休憩時間にスタッフが回収いたします。

後半では、皆様から質問用紙で頂いた質問に対して、講演者の方々にできるだけお答えをいただきたいと考えております。なお、その際、お名前はご記入いただいても読み上げません。また、いただきましたご意見、ご質問は、シンポジウムの記録や関連ウェブサイトで公開させていただく可能性がありますが、その際にも記入者は特定できないようにいたします。

また、アンケートもお手元にあろうかと思いますが、こちらはシンポジウムが終わって皆様がお帰りになるときに、出口でスタッフが回収いたしますので、お渡しください。今後の企画に役立てていきたいと考えておりますので、皆様の貴重なご意見をいただけますようお願いいたします。

ではさっそく、最初の講演に移りたいと思います。まずは、鈴木賢先生にお話しいただきます。

鈴木賢先生は、北海道大学大学院法学研究科で長年教鞭を執られ、現在は明治大学法学部の教授でいらっしゃいます。ご専門の中国法、台湾法、アジア法、比較法のご研究に加えて、「レインボーマーチ札幌」に開始当初から関わり、札幌市パートナーシップ宣誓制度施行でも中心的役割を果たされたことなどを通じて、ご存じの方が多いのではないかと思います。本日は、そうした長年のご活動の中で得られたさまざまな経験を踏まえた、貴重なお話をご披露いただけるものと思います。